運動教育を意味する「体育」概念の形成過程に関する再検討：
森有礼の兵式体操論に焦点をあてて

中野 浩一

A reconsider about the process of forming the concept of “physical education” which means an education for both the physical and the mental by means of physical exercises in modern Japan: Focusing on the thoughts of the military drill by Arinori Mori

Koh-ichi Nakano

Abstract

According to a previous study, the concept of “physical education” was introduced into Japan as a result of the influence of Westernization after the Meiji Restoration (1868). In the opening 10 years of the Meiji era, the initial concept was education for physical aspect, and as its method, both physical exercise and hygiene were used. Early in the second decade of the Meiji era, a second concept arose from the first, namely education for physical aspect being restricted to physical exercise as its method. Later in the second decade of the Meiji era, a third concept—that was education for both physical and mental aspects through physical exercise—arose. However, the previous study failed to address some of the following points. Arinori Mori, a foreign service employee and thereafter the first Minister of Education in 1884, addressed his thoughts concerning military drill in the 12th year of the Meiji era (1879); this led to the third concept, which was subsequently termed “physical education”. Therefore, the third concept which termed “physical education” had already been proposed in the early half of the second decade of the Meiji era, rather than in the latter half. To prove this, the present paper consists of the following three chapters: Chapter 1 discusses the background that led Mori to reach his conclusions about military drill. Chapter 2 demonstrates that the third concept was a consistent component of Mori’s thoughts, and Chapter 3 shows that the third concept which termed “physical education” existed early in the second decade of the Meiji era.

Key words : gymnastics, sports, Meiji era, history of school, movement education

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 48: 395-403, July, 2003)

キーワード：体操，スポーツ，明治時代，学校史

はじめに

日本における「体育」概念の変遷を扱った先行研究には、『日本体育史研究序説』（木下，1971）がある。本書は、「体育」の概念が明治10年代初頭の身体のための教育，すなわち身体教育に始まり，その目的を達成する手段として運動と衛生とが位置づけられたこと，明治10年代前半には，その概念から，運動という手段に偏した身体教育という概念が形成されたこと，明治10年代後半には，その概念から，運動を手段とした身体と精神のための教育，すなわち運動教育の概念が形成されたこと，さらに，明治30年代には，その概念から，教育的価値観の制約が失われ，現象としての運動そのものを意味する概念が形成された，と結論づけている（木下，1971，pp. 279-288）。

しかし，実際には，明治初年代に身体教育のみならず，運動教育の概念が存在するように^{註1)}，1879（明治12）年から始まる森有礼の兵式体操論にも，運動教育の概念が認められる。そして，同年には，その概念が「体育」と称されている。

したがって，運動教育を意味する「体育」は，木下が述べる明治10年代後半からではなく，明治10年代前半には，既に，存在したのである。

そこで，本研究は，1879（明治12）年から始まる森の兵式体操論には一貫して運動教育の概念が認められ，その概念が「体育」と称されることを明らかにする。これにより，先行研究において「矛盾」（木下，1971，p. 126）と評されていた森の兵式体操論が矛盾なく把握され，また，「体育」概念の変遷の再考に伴い，明治初期やそれ以前における日本の体育史を再考するきっかけとなるう。

Ⅰ 森有礼が兵式体操論を主張するに至る背景

森が兵式体操に初めて言及するのは，1879（明治12）年に東京学士会院で述べた「教育論 身

体ノ能力」である。

森は，1870（明治3）年に米国少辨務使に任命されて以来，外務省に属し，当時は外務大輔であった。森が文部省入りするのは，1884（明治17）年になってからである。

しかし，森は，1870（明治3）—1873（明治6）年の米国少辨務使時代に，既に，日本の教育改革に関心を示し，アメリカで様々な活動を行っている。例えば，森は，公務の傍らスペンサー（Spencer, H.）やミル（Mill, J.S.）の教育論を研究し，各学校の視察も行っている（大久保，1972，p. 207）。1872（明治5）年には，米国各界の有識者15人に宛てて日本の教育問題を解決すべく質問状を送付しているが，この中で森は，三育説に基づき，「日本の知的，道德的，身体的な状況の向上」（森，1873，p. 191）について意見を求めている。アメリカからの帰国の途次には，イギリスでスペンサーに会見している（大久保，1972，p. 209）。また，英米の教育に限らず，森は，ブルックス（Broocks, C.）の影響から，ドイツの中でも特に，プロイセンの教育制度に関心を示していた（海門山人，1897，p. 34）。

1879（明治12）年の「教育論 身体ノ能力」においても，森は，「現ニ瑞西其他ノ国ニ行ハル、所ノ兵式学校ノ制」（森，1879，p. 137）と述べるように，特にスイスの国名を示しているが，各国の「兵式学校」の制度を調査していることが伺われる^{註2)}。スイスの学校で体操科が必修となるのは，1879（明治12）年5月1日からであり（遠藤，1987，p. 134），その約5ヶ月後の10月15日に森が「教育論 身体ノ能力」を演説する。

また，森がその演説をする以前に，1876（明治9）年3月20日の『文部省雑誌』7号には，既に「郷兵ハ教育ヲ助クルノ説」と題し，スイスの「郷兵」制度と教育との関係を紹介する記事が掲載されている。この記事は，「独乙教育書抄」とあるので，ドイツの教育書から抄訳された記事である。記事の最後では，「若シ此方法ヲシテ盛大ニ至ラシメバ瑞西国等ノ諸邦ト異ルコトナカルヘシ」（近藤訳，1876，p. 26）と述べられているので，スイスの「郷兵」制度が当時のドイツで注目

されていたことが伺われる。

この記事によると、スイスの「郷兵」制度は、「内国人民ノ身体及精神ヲ成育シ氣力ノ萌芽ヲ長養スルノ園圃」であり、その「氣力」とは、「愛国心ノ氣力ニシテ本国ノ為ニハ死ヲ以テ強敵ニ対シテ屈撓セズ之カ防禦ヲナスノ念力」（近藤訳，1876，p. 24）である。そして、「コノ念力ヲ達セシムル者ハ亦体操及練兵」（近藤訳，1876，p. 24）と、「体操及練兵」の効果が強調されている。この他にも、「郷兵ノ会合ニ同参」と、「国内ノ壮丁ヲシテ勇敢ナラシムルノ功ヲ奏ス」（近藤訳，1876，p. 25）と述べられている。

このように、「郷兵」制度による「体操及練兵」が「内国人民ノ身体及精神ヲ成育」し、また、「勇敢ナラシムルノ功ヲ奏ス」と述べられているので、この記事には、運動（体操及練兵）を手段とした身体と精神のための教育、すなわち運動教育の概念が認められる^{註3)}。

このスイスの制度が一般的に知られていたことは、1880（明治13）年の『尚武論』（尾崎行雄）で、「体育ノ法」として「操銃行軍ノ法ヲ以テセハ啻タ身体運動ノ功益有ルノミナラス軍器ヲ執リ敵兵ニ当ルノ術ヲ知り兼テ勇武ノ習ヲ生ス」と兵式体操が推奨され、「現ニス井ツランド国ノ如キハ小学ニ練兵ノ課程ヲ置テ兵事ヲ練習セシムル」（尾崎，1880，p. 81）と、スイスの小学校が例に取り上げられていることから明らかとなる。

以上のように、森がはじめて兵式体操に言及するのは、外務大輔を務めていた1879（明治12）年であるが、森は、1870（明治3）年に米国少辨務使に任命されて以来、日本の教育改革に関心をもち、英米に限らず、プロイセンなど各国の教育制度を研究していた。また、森は、兵式体操論を主張するにあたり、特にスイスの国名をあげているが、当時、スイスで行われていた「体操及練兵」は、身体の育成のみならず、愛国心や勇敢な精神を育成する手段としてドイツで注目されており、既に日本にも紹介されていたのである。

II 森有礼の兵式体操論に認められる運動教育の概念

1. 1879（明治12）年の「教育論 身体ノ能力」

1879（明治12）年5月、森は東京学士院会員に当選する。東京学士会院では、ほぼ毎月、15日に例会が開かれていた。この例会では、教育問題などが議案の形で提出され、討議後に可否の採決を行い、可決の場合は文部卿に建議することとなっていた。

森は、同年10月15日の「第十三会」において「教育論 身体ノ能力」と題する議案を提出する。この議案の続きは翌月15日の「第十四会」でも述べられるが、『東京学士会院紀事』には「第十三会」の草稿しか掲載されていない。

そこで、「第十三会」の「教育論 身体ノ能力」を用いて森の兵式体操論を検討する。

森は、まず、「諸君ノ已ニ詳知スル所」の「教育ノ要」として、「知識、徳義、身体」（森，1879，p. 134）の三能力を育成する三育説をあげる。三育説は、教育目的を精神（知・徳）と身体との二つの側面から考える教育理論である。そして、森は、「現今我国人ノ最欠ク所ノ者ハ、彼ノ至重根元タル三能力ノ一、即身体ノ能力」（森，1879，p. 134）であるとし、従来の三育説に基づく「身体ノ能力」の育成が日本の旧習より実施の困難であることを指摘する。この旧習とは、「沃土」「暖気」「食料」「住居」「衣製」「文学」「宗教」（森，1879，p. 135）の七つである。特に、「恐ラク急ニ改メ難カラシム」点としては、「第三食料、第四住居、第五衣製ノ三因」（森，1879，p. 136）と、衣食住の衛生をあげている。

そこで、森は、独自の「我カ題起シタル身体ノ能力」（森，1879，p. 137）の育成を主張する。この「身体ノ能力」は、「人生至重タル三徳ノ一」（森，1879，p. 137）、すなわち「知仁勇三徳」（森，1879，p. 134）の一つである「勇」に当たると述べられている。また、「此力（身体ノ能力…筆者註）ハ独身体ノ健康上ヨリ来ルノミノ者ニ

非ス、敢為ノ勇氣モ亦之ニ加ハラサレハ完全ナルヲ得ス」(森, 1879, p. 137)とも述べられている。

したがって、森独自の「身体ノ能力」は、従来の三育説に基づく「身体ノ能力」が身体面に偏ることを批判し、「身体ノ健康」のみならず、精神面の「敢為ノ勇氣」をも加えた能力を意味している^{註4)}。

この森独自の「身体ノ能力」を「我所要ノ点度ニ伸達」するには、「其法蓋一ニシテ足レリトセサレトモ、…強迫体操ヲ兵式ニ取り、」(森, 1879, p. 137)と述べられている。この兵式体操は、「専ラ其教育セラル、所ヲ身体上ニ行フニ在リテ、決シテ軍務ノ為ニ設ケ、意想ヲ其間ニ寓セシ者ニ非サル」(森, 1879, p. 137)と、教育の手段に限定されている。

このように、森の「身体ノ能力」には、運動(兵式体操)を手段とした身体教育のみならず、森が独自に加えた運動(兵式体操)を手段とした精神教育の概念も認められる。

したがって、明治10年代前半にあたる1879(明治12)年の森の兵式体操論には、運動(兵式体操)を手段とした身体と精神のための教育、すなわち運動教育の概念が認められるのである。

ここで注意しておきたいのは、森が江戸時代に主流だった儒学に基づく「知仁勇」に触れていることである。これは、森が「現ニ瑞西其他ノ国ニ行ハル、所ノ兵式学校ノ制ヲ参酌シ、我国相応ノ制ヲ立ツルニ在リ、」(森, 1879, p. 137)と、欧米制度を単に移植するのではなく、日本の国情に即した案を考えているからである^{註5)}。

以上のように、森は、明治10年代前半に、従来の三育説に基づいて身体面に偏る「身体ノ能力」を批判し、森独自の精神面を加えた「身体ノ能力」を主張する。この森独自の「身体ノ能力」には、運動教育の概念が認められるのである^{註6)}。

2. 1882(明治15)年の「学政片言」

森の「教育論 身体ノ能力」は、1879(明治12)年11月15日の「第十四会」において採決されるが、反対する会員があり、結局、稿本を院中

にとどめて再議されることと決定される(日本学士院, 1962, p. 175)。森は、同年11月6日、特命全権公使としてイギリス駐在を命ぜられ、翌月には日本を発たねばならず、その後の討議には加われなかった。森が帰国するのは、1884(明治17)年3月14日である(大久保, 1972, p. 216)。

しかし、森は、その議案を諦めておらず、イギリスから1880(明治13)年3月4日付けの東京学士会院に宛てた手紙で、次のように述べている。

「余か曾て呈したる身体ノ能力論の主旨に付院議如何に決したるや、其後反覆考究するも前説の不可なるを発見せず、却て益々其实行の緊要なるを覚ふ耳、又若未だ尽さる所あらは速に高論を辱ふし、尚之を詳明にするの幸を得んことを望む」(森, 1880a, p. 138)

また、森は、手紙の中で、「力の及ふ丈応さに注意して教育上の事件を四方に搜索し、或は間々意見を書して送呈することを怠らざるへし、」(森, 1880a, p. 138)とも述べているので、諸外国の教育を調査する際、兵式体操も調査対象の一つであったと考えられる。

例えば、1880(明治13)年9月16日付の家族宛ての手紙には、「前月中ハ政府之御用筋を以て瑞西国へ出張仕り是程より諸所遊歴之後三日前ニ倫敦へ帰府」(森, 1880b, p. 213)とある。したがって、この手紙からは、森が8月中にスイスを訪問し、「諸所遊歴之後」、9月13日にイギリスへ戻ったことしか分からない。しかし、森は、以前、兵式体操を述べるにあたり、特にスイスの国名をあげているので、訪問時にスイスの兵式体操を調査した可能性が高いと考えられる。

1882(明治15)年には、憲法調査のため、フランスにいた伊藤博文に対し、「学政片言」を送付する。この「学政片言」では、「人ニ知能徳能体能アリ」(森, 1882b, p. 141)と、三育説に基づく表現が用いられている。しかし、ここでの「体能」は、「身体ノ能力」と同義に用いられている。なぜなら、森は、「体能」と同義に用いられる「体軀ノ鍛錬」を、「体軀健強」の手段でもあるが、「氣質ヲ鍛錬スル為メニ不可欠」(森, 1882b, p. 142)と、精神教育の手段でもあるこ

とを強調しているからである。

このように、1882（明治15）年の「学政片言」における「体能」でも、「身体ノ能力」と同様、運動教育の概念が認められる。

3. 1885（明治18）年の埼玉県師範学校における演説

1884（明治17）年3月の帰国後、森は、同年5月7日に参事院議官と文部省御用掛との兼務を命ぜられる。森は、近々発足する新内閣で、文部大臣の座を約束されていた。それに備えて、森は、各学校の視察を行う。

特に、兵式体操に関しては、1885（明治18）年12月19日、埼玉県師範学校で行われた演説が有名である。

森は、この演説で、「従順友情威儀」（森，1885，p. 344）の三気質の必要性を説き、「以上演フル所ノ三個條ノ目的ヲ達セントスルニ就キテ其幫助トナルモノ多クアル」が、特に「道具責メノ方法」として「兵式体操」（森，1885，p. 345）をあげる。

森同様、体操による三気質の育成を述べる理論がドイツの体操家であるシュピース（Spiess, A.）の後継者であるスイスのマウル（Maul, A.）の体操論でも認められる。

当時、ドイツやスイスでは、1860年代の平行棒論争に終止符を打ち、マウルの影響で、シュピースの体操論に基づく体操教授が行われていた（成田，1977，pp. 574-580）^{註7)}。

シュピースの体操論では、権威に対して「従順（Gehorsam）」で、国家に対して「奉仕（willige Dienst）」する気質を育成し、これらの目的によって力づけられた「秩序（Ordnung）」の精神を兼ね備えた臣民の育成を主張する（Spiess, 1851，p.V；成田，1977，p. 484）。マウルも、同様に、「従順（Unterordnung）」「奉仕（Dienst）」（Maul, 1883，p. 6）を目的に掲げ、シュピースの「従属的規律（gehörige Zucht）」と秩序（Ordnung）」（Maul, 1883，p. 7）を育成する体操論を理想とする。

このマウルの体操論は、そのままではないが^{註8)}、

森の主張と一致する。

森によると「従順」は、「文字上ヨリ見ルトキハ悪事ニアレ善事ニアレ、其是非利害ヲ撰ハス之ニ従順」すべきことを意味するのではなく、「師範学校生徒ニシテ遵奉スヘキハ校長ノ命ナリ、…又教員之ヲ伝フルコトアリ、」（森，1885，p. 344）と述べられている。

したがって、森の「従順」は、マウルと同様、権威に対する「従順」を意味する。

二つ目の「友情」は、「友情ノ培養ニ欠クル所アランカ、其卒業ノ後教員トナリテモ善良ナル事業ヲナスコト能ハサルヘシ、」（森，1885，p. 345）と、同僚もしくは教員間の連帯、すなわち全体との関わりについて述べられている。マウルの場合、国家に「奉仕」する軍人の育成を述べているので、封建的な観点から全体への関わりについて述べられているが、森の場合は、「兵式体操ハ決シテ軍人ヲ養成…スルカ如キ目的ヲ以テ之ヲ学科ノ中ニ加ヘタルモノニアラス、」（森，1885，p. 345）と、軍人の育成手段ではないことを述べ、また、複数の学年間で「交互兵卒トナリ伍長トナリ或ハ司令官トナリ」（森，1885，p. 346）と、上下関係が絶対的ではないので、非封建的側面が認められる。この点で両者は相違するが、マウルの「奉仕」と森の「友情」は、全体との関わりについて述べられている点では一致するのである。

三つ目の「威儀」は、「人ノ命令ニ従フニモ又人ヲ命令スルニモ共ニ欠クベカラサル者」（森，1885，p. 345）なので、将来、教員として校長などの上位者と下位にある生徒との間を取り持つための秩序を意味する。

したがって、森が述べる三気質は、マウルが述べる生徒の立場からではなく、教員の立場に換言されてはいるが、論理構造がマウルの体操論と一致するのである。

森は、前述のように、1879（明治12）年末から1884（明治17）年初頭の駐英特命全権公使時代に「教育上の事件を四方に搜索」（森，1880a，p. 138）している最中に、スイスを訪問する。また、1882（明治15）年5月27日付の伊藤博文宛の手紙には、ドイツを訪問したときの感想を「乍

去独逸殊ニ普国は可見もの夥しく其人質も亦西洋之支那人風有之」(森, 1882a, p. 147)と述べており, 特にプロイセンに関心を示している。1884(明治17)年1月に帰国命令を受けた森は、『読売新聞』によると, 「来月(2月…筆者註)上旬同地(イギリス…筆者註)を出発し日耳曼国へ廻られしうへ一先帰朝せらるゝ旨」(1月24日付, 3面)と報じられており, 同年3月2日にフランスから日本へ向けて出航している(4月6日付, 3面)。

特に, マウルの主著となる“Anleitung für den Turnunterricht an Knabenschulen (1-3Thl.)”が1876—77(明治9—10)年に出版されているが, この著書の3訂増補版(1巻が1883年, 2巻が1880年, 3巻が1879年に出版。)は, 政策に関わる資料を集めていた「文部省書庫」に所蔵されていた^{註9)}。

したがって, 近々発足する内閣で, 文部大臣の座を約束されていた文部省御用掛の森は, 当時, ドイツやスイスで一般的であり, 文部省でも参照されていたマウルの体操を知っていたと考えられ, 森が兵式体操による「三気質」の育成を述べた背景には, ドイツやスイスの動向が影響したと考えられる。

以上のように, 森の三気質を述べる兵式体操論では, 「教育論 身体ノ能力」において森が独自に加えた, 運動(兵式体操)を手段とした精神教育が強調されている。

4. 1887(明治20)年頃の「閣議案」と「兵式体操に関する建言案」

森は, 1885(明治18)年12月22日, 文部大臣に任命されるが, 1887(明治20)年頃と思われる「閣議案」でも「体操練兵」を, 「忠君愛国」(森, 1887a, p. 158)など, 精神教育の手段として重視する。また, 同じ頃に立案されたと思われる「兵式体操に関する建言案」でも, 「知育徳育体育」(森, 1887b, p. 159)の内, 「体育」を重視し, 「国家富強ハ忠君愛国ノ精神旺実スルヨリ来ル, 故ニ文部ノ職ハ主トシテ此精神ヲ養成渙発スルノ責ニ当ラサルヘカラス, 是ヲ以テ体育(下

線筆者)ノ切要ヲ認メ」(森, 1887b, p. 160)と述べている。つまり, 森は, 国民の身体問題の解決のみならず, 忠君愛国的な精神育成の手段として, 兵式体操をより重視した運動教育を「体育」と表現する。

したがって, 「閣議案」と「兵式体操に関する建言案」でも, 「教育論 身体ノ能力」において森が独自に加えた, 運動(兵式体操)を手段とした精神教育が強調されている。

結局, 森が主張する兵式体操論には, 一貫して, 運動(兵式体操)を手段とした身体と精神のための教育, すなわち運動教育の概念が認められるのである。

III 明治10年代前半に現れる運動教育を意味する「体育」

前述のように, 森が述べる兵式体操論には, 一貫して運動教育の概念が認められる。

しかし, 森は, 1879(明治12)年には「身体ノ能力」とだけ述べ, 「体育」という表現を用いていない。1882(明治15)年の「学政片言」でも「体能」が用いられている。1887(明治20)年頃の「兵式体操に関する上奏案」では「体育」と表現されている。

しかし, 1879(明治12)年の「身体ノ能力」や1882(明治15)年の「体能」は, 当時の日本において, 「体育」の一つと認識されたと考えられる。なぜなら, 森は, 「能力ヲ分別シテ知識, 徳義, 身体ノ三」や「三能力ノ一, 即身体ノ能力」(森, 1879, p. 134)と, 三育説に基づく表現を用いていることと, 1878(明治11)年の体操伝習所の設立を契機に「体育」という表現が公文書中で統一的に使用されるようになったにしろ, 世間一般では, 「身体教育」など, その他の表現も認められるためである(木下, 1971, p. 71)^{註10)}。

実際, 下記のように, 森の「身体ノ能力」を「体育」と見なす例が認められる。

『東京学士会院紀事』14号には, 1879(明治12)年11月15日に開かれた「第十四会」において, 「森有礼君ハ, 前会ノ緒ヲ続テ生徒体育(下線筆者)等ノ意見ヲ記セル演説案ヲ朗読シ畢レ

り,」(日本学士院, 1961, p. 90) と示されている^{註11)}。また, 1880 (明治13) 年9月15日に開かれた「第二十二会」では, 再度, 森の「教育論 身体ノ能力」が取り上げられ, 福沢諭吉が「森君ノ説唯体育 (下線筆者) ヲ主トシテ兵式ヲ用キント云ヘハ別ニ異論ナシ,」や神田孝平が「森君ノ議案中ニ兵式ヲ用キルハ練兵ニ意アルニ非ス, 専ラ体育ノ為 (下線筆者) ナリト云ヘル語アレハ体育 (下線筆者) ノ為ニ止ルコト明カナリ」(日本学士院, 1961, pp. 120-121) と, 森の意見に「体育」をあてて説明している。

このように, 森の意見に対して「体育」を当てる例が見られることから, 明治10年代前半には, 既に, 運動教育の概念を「体育」と見なす傾向が認められるのである^{註12)}。

IV 結 論

森有礼は, 日本の教育改革に関心を持ち, 1870 (明治3) 年に米国少辨務使に任命されて以来, 英米に限らず, プロイセンなど各国の教育制度を研究していた。

森が兵式体操に初めて言及するのは, 1879 (明治12) 年に東京学士会院で述べた「教育論 身体ノ能力」である。この中で, 森は特にスイスの国名をあげるが, 当時, スイスで行われていた「体操及練兵」は, 身体の育成のみならず, 愛国心や勇敢な精神を育成する手段として注目されていた。このスイスなどで行われていた兵式体操の制度に基づき, 森は, 日本における従来の三育説に基づく「身体ノ能力」の育成が身体面に偏ることを批判し, 身体面のみならず, 精神面をも加味した「身体ノ能力」を兵式体操によって育成すべきことを主張する。

この主張には, 運動を手段とした身体教育と, 森が独自に加えた運動を手段とした精神教育との両方の概念が認められる。したがって, 明治10年代前半にあたる1879 (明治12) 年の森の兵式体操論には, 運動を手段とした身体と精神のための教育, すなわち運動教育の概念が認められる。そして, この概念は, その後の森の主張に一貫し

て現れる。

この森の主張に見られる運動教育の概念は, 既に, 明治10年代前半にあたる1879 (明治12) 年には「体育」と称されている。

したがって, 運動教育を意味する「体育」は, 明治10年代前半には存在したのである。

註

註1) 1875 (明治8) 年4月19日の『文部省雑誌』8号では, 「身体ニ関スル教育」を述べる中で, 「体操」により「身体ヲ健康ニシ体貌ヲ豊美ニシ及後年軍事アルニ当リテ驍勇ナラシメンコトヲ欲スルナリ」(訳者不明, 1875, p. 16) と, 運動(体操)を手段とした身体と精神のための教育, すなわち運動教育の概念が認められる。

註2) 森が各国を参照していることは, 1874 (明治7) 年5月の『明六雑誌』7号に載った「独立国権義」にも現れている。森は, この中で, 国際法上から国家の独立とはいかなるものであるかを説くが, オーストラリアを除く四大洲の国々に言及している。

註3) この1876 (明治9) 年3月20日の記事は, 同年12月に出版される『文部省雑誌』の歴代の翻訳記事をまとめた合本にも掲載されている。

『森有礼全集』の年表によると, 森は, 1875 (明治8) 年11月, 清国特命全権公使に任命され, 12月には神戸港から清国へ向かっている。しかし, 1876 (明治9) 年5月初めには賜暇帰朝で東京に帰り, 同年10月に再び清国へ向かっている。『読売新聞』によると, 森は, 1877 (明治10) 年5月にも帰国し (6月1日付, 1面), 8月27日か28日には清国へ行く予定 (8月24日付, 3面) とあり, 任を解かれて帰朝するのは1878 (明治11) 年5月24日 (5月25日付, 2面) である。

したがって, 各国の教育制度に関心を示していた森が, 帰国時に『文部省雑誌』やその合本を見た可能性は高いと考えられる。

註4) 森は, 従来の三育説に基づく身体教育を意味する「身体ノ能力」を批判し, 森独自の運動教育を意味する「身体ノ能力」を主張しているにもかかわらず, 木下は, 『日本体育史研究序説』(1971年)において, それらを区別することなく, 両者とも森の意図したことと考えている。この

結果、木下は、「すなわち、森のいう『体育』の概念は、当初から、身体教育でありながら、精神教育をも含むという矛盾を犯していた。」（木下、1971, p. 126）や「すなわち、森には、三育主義に対する原理的認識に欠ける点があり、」（木下、1971, p. 127）や「しかし、森のいう『体育』は、身体教育ではなくて、運動教育でなければならないという明確な認識に基づく必然的産物ではなく、むしろ、偶然の結果にすぎなかった。」（木下、1971, p. 127）など、森の意図を誤解している。このため、木下は、森の「身体ノ能力」を「このように、森の学校体操としての『兵式』採用論は、『身体ノ能力』の育成をめざしていた。したがって、『兵式』は身体教育を意味する第1の体育の手段だったのである。」（木下、1971, p. 126）と、森の意図が身体教育にあったと結論づけている。

したがって、木下の『日本体育史研究序説』は、兵式体操論での森の意図を正確に把握していない。

註5) 『新修 森有礼全集』の編者である犬塚孝明は、森が日本の国情に即した案を考えるようになった理由をスペンサーの影響と考えている。犬塚によると、森は、1873（明治6）年、スペンサーから次のような「保守的な忠告」（犬塚、1986, p. 220）を受けている。

「森氏に対する私の忠告は、新しい諸制度は連続性を破壊することを阻止するために、できるだけ現在の諸制度に接ぎ木（grafted）されなければならない—新しいものによって古いものを取り換える（replacing）のではなく、古い形態を次第に大きな程度まで修正しなければならないということでした。」（犬塚、1986, p. 221）

註6) 森は、西洋で学んだ成果に基づき、運動教育を意味する「身体ノ能力」を主張するが、儒学における「知仁勇」と、東洋的な考え方も示している。当時、西洋では、デカルト（Descartes, R.）に代表される心身二元論が、東洋では、榮西に代表される心身一如論が一般的であったが、西洋の心身二元論では、身体の育成と精神の育成とは別の次元であり、身体教育の概念のように、必ずしも両者を伴う必然性は認められず、東洋の心身一如論では、身体の育成に止まらず、必

ず精神の育成をも伴う思想であり、両者は相違する。したがって、森は、本来、両者の相違をどのように克服したのかも指摘する必要があったはずである。しかし、森は、学問の究明を志していたわけではないので、その点に触れた論究は認められない。筆者の推測によると、森にとって運動教育の概念は、心身一如論と相克することなく、受け入れられたと考えられる。なぜなら、運動教育の概念は、心身両方の育成が考えられているため、心身一如論と相似するからである。

註7) 1879（明治12）年6月5日の『教育雑誌』（文部省発行）99号では、「宇国体操術」と題し、「スピーズ氏」の体操が「当今独逸及ビ瑞士ニ行ハル、者ハ多ク皆同氏ノ方法ニ因レリ」（近藤訳、1879, pp. 38-39）と紹介されている。

註8) 前述したように、森は、欧米の制度をそのまま移植することに批判的だった。

註9) 国立国会図書館所蔵の同書には、朱の押印で、「文部省書庫」、「明治廿年十二月九日文部省交付」、「東京図書館蔵」とある。

註10) 木下は、『日本体育史研究序説』において、1881（明治14）年の「小学校教員心得」が意識的に「体育」ではなく「身体教育」を用いたことを契機として、「『身体（の）教育』は、『体育』の意味が身体教育であることを強調する必要のある場合にだけ使用される傾向を示す。」（p. 66）と述べている。しかし、言葉は「身体教育」でも、その概念は運動教育である場合が認められる。例えば、1892（明治25）年の『歴史教授法』（本荘太郎）では、教科目表に「身体教育—体操科」（p. 14）と示されている。

註11) 『東京学士会院紀事』には、「第十四会」で述べられた森の演説自体は掲載されていない。したがって、森がこの演説で「体育」を使った可能性も残される。

註12) その他にも、明治10年代前半には、1880（明治13）年2月16日の『教育雑誌』116号（文部省刊）で、「体育」（p. 13）が「体術」（p. 13）と同義に用いられ、「此体術ヲ整齐セル意見中ニハ大ニ道德上ノ感覚ヲ有セリ故ニ其該術ヲ設置セシハ啻ニ身体ヲ壮健ナラシムル為ノミナラズ又同心協力及ビ命令遵奉ノ二習慣ヲ養ヒ…」（pp. 13—14）と述べられており、運動教育を意

味する「体育」が認められる。

文 献

遠藤盛男（1987）スイス国民学校の制度史研究．風間書房：東京．

犬塚孝明（1986）森有礼．吉川弘文館：東京．

海門山人（1897）森有礼．民友社：東京．

木下秀明（1971）日本体育史研究序説．不昧堂出版：東京．

近藤鎮三訳（1876）独乙教育書抄 郷兵ハ教育ヲ助クルノ説．文部省雑誌 7号（3月20日），文部省．

近藤鎮三訳（1879）独逸教育書抄 宇国体操術．教育雑誌 99号（6月5日），文部省．

Maul, A. (1883) Anleitung für den Turnunterricht an Knabenschulen. 3 verb. u. verm. Aufl., G. Braun'sche Hofbuchhandlung: Karlsruhe.

森 有礼（1873）Education In Japan（明治6年）．（大久保利謙監修（1999）新修森有礼全集第5巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1879）教育論 身体ノ能力（明治12年）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第2巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1880a）東京学士会院への返翰（明治13年）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第2巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1880b）家族宛 三（明治13年）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第3巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1882a）伊藤博文宛 六（明治15年）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第3巻．文泉

堂書店：東京．収載）

森 有礼（1882b）学政片言（明治15年）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第2巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1885）埼玉県尋常師範学校における演説（明治18年）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第2巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1887a）閣議案（明治20年頃）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第2巻．文泉堂書店：東京．収載）

森 有礼（1887b）兵式体操に関する建言案（明治20年頃）．（大久保利謙監修（1998）新修森有礼全集第2巻．文泉堂書店：東京．収載）

成田十次郎（1977）近代ドイツスポーツ史I 学校・社会体育の成立過程．不昧堂出版：東京．

日本学士院編（1961）日本学士院八十年史 資料編一．日本学士院：東京．

日本学士院編（1962）日本学士院八十年史．日本学士院：東京．

大久保利謙（1972）森有礼年譜，森有礼全集第1巻，宣文堂書店：東京．

尾崎行雄（1880）尚武論．新潟新聞社：新潟．

Spiess, A. (1851) Turnbuch für Schulen als Anleitung für den Turnunterricht durch die Lehrer der Schulen, Schweighauser'sche Buchhandlung: Basel.

訳者不明（1875）独乙「ドクトルリーケ」教育論摘訳 希臘ノ碩儒「プラトオ」及「アリストテルス」教育原因論．文部省雑誌8号（4月19日），文部省．